



Title	苗族創世歌と上博楚簡『凡物流形』《問物》：『楚辭』天問の淵源
Author(s)	浅野, 裕一
Citation	中国研究集刊. 2010, 50, p. 209-227
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/60823">https://doi.org/10.18910/60823</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 苗族創世歌と上博楚簡『凡物流形』《問物》

—『楚辞』天問の淵源—

浅野裕一

### 一 『凡物流形』と《問物》

馬承源主編『上海博物館藏戰國楚竹書(七)』(上海古籍出版社・二〇〇八年十二月)は、「凡物流形」なる篇題を持つ文献を収録する。積文を担当した曹錦炎氏は、『凡物流形』の体裁や内容が『楚辞』天問と強い共通性を示す点を指摘し、「我們將《凡物流形》篇歸入楚辭類作品」との見解を提示した。だが内容を精査してみると、『凡物流形』はもともと全く異なる二つの文献が、誤って一つに接合された文献であることが判明する。

第一の文献は、『楚辞』天問と同じく全篇が「有問無答」の形式を踏む楚賦の一種であり、これを仮に《問物》と命名して置く。第二の文献は、各段落の冒頭が「聞之曰」

で始まる聞き書きの形態を取る道家思想の文献であり、これを仮に《識一》と命名して置く。我々は『凡物流形』を単一の文献として扱うべきではなく、『問物』と《識一》の二つに分けて研究すべきだというのが、筆者の考えである<sup>(注)</sup>。

そこで小論では《問物》の側を取り上げて考察してみたい。かつて伊藤清司氏は「楚辞」天問と苗族の創世歌」と題する論考において、『楚辞』天問と貴州省の苗族が伝誦する古歌との間には、①天地創始から始まる神話伝承を素材にする、②長編叙事詩の形を取る、③疑問句を連ねる特殊な形式を採る、といった基本的性格の共通性が見られると指摘した。その上で伊藤氏は、『楚辞』天問の原型は苗族の創世歌のごときものではなかったかとする

新たな視点を提起した(注2)。だが今回の《問物》の発見によつて、苗族創世歌と『楚辭』天問の間に、さらに中間型とも言うべき作品群が存在していた状況が明確となつた(注3)。

とすれば、まず苗族創世歌と《問物》を比較し、兩者の間の異同を明確にする作業が必要とならう。そのため本稿では、伊藤論文が冒頭部分のみ引用していた貴州苗族創世歌の全体を扱う形で《問物》と比較する方法を取る。

## 二 貴州苗族創世歌の構成

まず最初に貴州苗族創世歌「造天地万物歌」の全体を、筆者による和訳とともに掲げて置く。

造天地万物歌(楊芝唱・貴州省民間文学工作組採録)

(1)

世上の人們呵，  
我問你來你問我：  
在很古很古的時候，  
天是怎樣生的？

世の人々は、  
互いに訊ねたり。  
太古の昔、  
天はいかにして生まれしや？

是哪個來創造的？

是爺覺朗努，

是他來生的，

是他來創造的。

(2)

地是怎樣生的？

是哪個來創造的？

是爺覺朗努，

是他來生的，

是他來創造的。

(3)

人類是怎樣生的？

是哪個來創造的？

是爺覺朗努，

是他來生的，

是他來創造的。

(4)

爺覺朗努呵，

誰か天を造りしや？

そは爺覺朗努ユンジュエラノなり。

かの神が生みたり。

かの神が造りたり。

地はいかにして生まれしや？

誰か地を造りしや？

そは爺覺朗努なり。

かの神が生みたり。

かの神が造りたり。

人類はいかにして生まれしや？

誰か人類を造りしや？

そは爺覺朗努なり。

かの神が生みたり。

かの神が造りたり。

爺覺朗努は、

他造天爲了什麼？

在很古很古的時候，

天空一片混沌，

天神沒有個起居處所。

爺覺朗努呵，

要在天空釘金星；

讓金星光閃閃；

要在天空嵌寶石，

讓寶石亮晶晶。

(5)

把天空造成簸箕一樣，

象簸箕又圓又平；

把天空造成篩子一樣，

かの神はなぜに天をば造りしや？

太古の昔、

天空はただ果てしなき混沌なれば、

天神に起居する場所すらあらざりき。

爺覺朗努は、  
天空に金星を打ち付けんとし、

金星をピカピカ光らせたり。

天空に宝玉を散りばめんとし、

宝玉をキラキラ光らせたり。

天空をば塵取りのごとくに作り成し、

塵取りのごとく円かに平らかにしたり。

天空をば篩のごとくに作り成し、

象篩子又滑又光：

好讓太陽姑娘象轆轤一樣打轉，

太陽娘の轆轤のごとく回轉し易きがために、

好讓月亮哥哥昼夜循環，  
月兄いの昼夜分かつ巡り易きがために、

讓大星星和小星星，  
羅列成行布滿天上。  
大なる星も小なる星も、  
行列なして満天に布かせたり。

(6)

爺覺朗努呵，

造出了圓溜溜的天空，

讓彩雲飄上飄下，

造出了光滑滑的天空，

讓風儿吹來吹去，

造出了平坦坦的天空，

篩のごとくツルツルと光らせたり。

太陽娘の轆轤のごとく回轉し易きがために、

好讓月亮哥哥昼夜循環，  
月兄いの昼夜分かつ巡り易きがために、

讓大星星和小星星，  
羅列成行布滿天上。  
大なる星も小なる星も、  
行列なして満天に布かせたり。

爺覺朗努は、

くりくり円き天空をば造り出し、

彩雲をして昇降せしめ、  
スベスベ光る天空をば造り出し、

風をしてあなたこなたに吹き渡らしめ、

真つ平らな天空をば造り出

讓百鳥自由飛翔，

し、  
百鳥を自在気ままに飛ばしめ  
て、

爺覺朗努呵，  
才有個起居地方。

爺覺朗努は、  
ようやく起居する場所をば得  
たり。

(7)

爺覺朗努呵，  
他造地爲了什麼？

爺覺朗努は、  
かの神はなぜに地をば造りし  
や？

在很古很古的時候，

太古の昔、

爺覺朗努呵，  
沒有個立脚處所。  
造好了平坦光滑的天，

爺覺朗努は、  
足着く場所すらあらざりき。  
平らかで光れる天を造りたれ  
ば、

又來造廣闊無邊的地。

こたびは廣大無辺の地をば造  
れり。

(8)

在大地上造出大壑深沟，

大地には大いなる溪、深き谷  
をば造り出し、

讓江河洪水滾滾奔流；

江河の水の溢るるを勢い付け  
て流したり。

在大地上造出崇山峻峰，

大地には高き山、険しき峰を  
ば造り出し、

讓山峯與山峰相抱；

山と峰とを相抱かしむ。  
大地には深き池、険しき谷を  
ば造り出し、

讓陡壁和懸岩對笑；

絶壁と断崖をして相笑わし  
む。

造出紅的黑的泥土，

赤き泥土、黒き泥土をば造り  
出し、

又在泥土里釘上青石板。

泥土に青き石板を打ち付けた  
り。

(9)

爺覺朗努呵，  
造出了大箐野林，

讓岩羊麂子麋鹿生存，

爺覺朗努は、  
大竹林をば造り出し、  
野羊・子鹿・大鹿どもを生か  
しめて、

大風在上面呼呼的跑過，

大風は竹林をヒューヒュー吹  
き渡り、

爲野獸們嘩嘩的唱歌。

野獸がためにザワザワと歌い

(10)

爺覺朗努呵，  
造出了岩山陡壁，  
讓雄獅虎豹棲息，  
青草鋪滿山峰，

たり。

蓋着猛獸們安穩的睡眠。

爺覺朗努は、  
岩山絶壁を造り出して、  
雄獅子・虎豹を棲み着かせ、  
青草を山また峰に敷き詰め  
て、  
猛獸どもを覆い隠し安らかに  
眠らせたなり。

(11)

爺覺朗努呵，  
造出了幽谷深注，  
讓江河有個靠岸，

海水綠蔭蔭，  
爺覺朗努呵，  
才有個立脚處所。

爺覺朗努は、  
深き池谷をば造り出し、  
江河には舟着ける岸辺有らし  
め、  
海の水は綠濃く、  
爺覺朗努は、  
やつとこ足着く場所をば得た  
り。

(12)

爺覺朗努呵，  
造好了平坦光滑的天，  
造好了廣闊無邊的地，  
造好了山坡山峰大箐野林，  
造好了山川河流野獸飛禽，  
爺覺朗努は、  
平らかで光れる天を造り上  
げ、  
廣大無辺の地を造り上げ、  
山岳や大竹林を造り上げ、  
山川や水流、野獸・飛鳥を造  
り上げしが、  
誰かそれらを治めんや？  
誰來治理呢？  
爺覺朗努はされば初めて人を  
造れり。  
男と女を造り出し、  
地上に家庭と稼業を持たせ、  
初めて平らかなる天を治め、  
初めて凸凹なる地を治め、  
初めて山々や峰々を治め、  
初めて大竹林を治め、  
初めて山川の水流を治め、  
初めて野獸・飛鳥を治むるに  
才來治理平坦的天，  
才來治理凸凹的地，  
才來治理山坡山峰，  
才來治理大箐野林，  
才來治理山川河流，  
才來治理野獸飛禽。

(14)

大地上有了人類，  
有了男人和女人，  
不知道造天地的神，  
不知道造萬物的神，  
不知道造人類的神，  
這個創造一切幸福的天神，

是住在什麼地方？

人們要去瞻仰，  
人們要去朝拜。

至れり。

すでに大地に人類有りて、  
男と女有るに、

天地を造りし神を知らず、  
万物を造りし神を知らず、  
人類を造りし神を知らず、

かのすべての幸を造り給いし  
天神は、  
いったいいづくに御座みまします  
や？

我等人間は仰ぎ見るべく、  
我等人間は拝礼すべし。

(15)

世上の人們中間、  
只有格鳥列察知道  
爺覺朗努說的話，  
格鳥列察心里清楚，  
格鳥列察才來講：

世の人々にありて、  
ただ、格鳥列察のみぞ知る、  
爺覺朗努の語りし話を、  
格鳥列察にははつきりと。  
格鳥列察が語るには、

創造天地的天神呵，  
住在高山大岩脚。

(16)

世上の人們中間、  
只有格鳥列榜曉得，  
爺覺朗努做的事，  
格鳥列榜心里明白。  
格鳥列榜才來說：  
創造萬物的天神呵，  
住在老林大樹脚。

(17)

世上の人們呵，  
照着格鳥列察的話，  
順着格鳥列榜的指點，  
尋找到高山大石脚，  
把背來的米酒，  
向大石脚敬獻。

天地を創造されし天神は、  
聳ゆる山の巨岩の下に在いませる  
と。

世の人々にありて、  
ただ、格鳥列榜のみぞ知る、  
爺覺朗努が為せし御業を、  
格鳥列榜には明らかに。  
格鳥列榜が語るには、  
万物を創造されし天神は、  
原始の森の巨木の下に在せる  
と。

世の人々は、  
格鳥列察が話を信じ、  
格鳥列榜が指示に従い、  
聳ゆる山の巨岩の下を訪ね、  
背負い来た米の酒を、  
巨岩の下に献上せり。

(18)

世上の人們呵，  
照着格鳥列察的話，  
順着格鳥列榜的指點，  
尋找到老林大樹脚，  
把帶來的紅冠鷄，  
向大樹脚敬獻。

世上の人々は、  
格鳥列察が話を信じ、  
格鳥列榜が指図に従い、  
原始の森の巨木の下を訪ね、  
持ち来る鶏を、  
巨木の下に捧げたり。

(20)

格鳥列察才來說：  
这位造天地的天神，  
不住在高山大石脚；  
格鳥列榜才來講：

格鳥列察はされば初めてかく  
説けり。  
かの天地を造りし天神は、  
聳ゆる山の巨岩の下には居ら  
れぬと。  
格鳥列榜はされば初めてかく  
語りき。

(19)

世上の人們呵，  
向大石脚敬了酒，  
向大樹脚殺了鷄，  
仍瞻仰不到造天地的天神，

世上の人々は、  
巨岩の下に酒をば供え、  
巨木の下に鷄をば殺せども、  
なお天地を造りし天神を仰ぐ

(21)

仍朝拜不着造萬物的爺覺朗努，  
仍找不到爺覺朗努的住所。

あたわず、  
なお万物を造りし爺覺朗努を  
拝むあたわず、  
なお爺覺朗努が住処を探し当  
つること叶わざりき。

世上の人們呵，  
不知道造天地的天神，  
是住在什麼地方；  
世上の人們呵，  
不相信格鳥列察的話，  
不理解格鳥列榜的意思：

世上の人々は、  
天地を造りし天神が、  
いずこに在るか知らざりき。  
世上の人々は、  
格鳥列察が話を信ぜず、  
格鳥列榜が意図をも分からず  
に、  
ひたすら爺覺朗努を仰ぎ見ん

一心要朝拜爺覺朗努。

とし、

ひたぶる爺覺朗努を拜まんとす。

爺覺朗努住在天上；

爺覺朗努は天上にこそ居られると。

格鳥列榜又來講：

格鳥列榜も再び語り。

造萬物的爺覺朗努，

萬物を造りし爺覺朗努は、

寬廣的大地是立脚處，

広き地に足こそ着けては居られるが、

(22) 世上の人們呵，

仍跑到高山大岩脚，

世の人々は、  
なおも聳ゆる山の巨岩の下を

訪ね、

仍找到老林大樹脚，

なおも原始の森の巨木の下を

訪ね、

去朝拜老林大樹，

原始の森の巨木を崇め、

去敬祭高山大石。

聳ゆる山の巨石を祭る。

人們祭石就從這里起，

諸人は石祭るこそ万事の始め

と心得て、

人們祭樹就從這里興。

諸人は木祭るこそ万事の本と心得たり。

(23)

格鳥列察又來說：

格鳥列察は重ねて説けり。

造天地的爺覺朗努，

天地を造りし爺覺朗努は、

平坦光滑的天是住所，

平らかで光れる天にお住まい

で、

爺覺朗努不住在地上。

爺覺朗努は地上に住んでは居られぬと。

『民間文学』一九六一年第六期所収

冒頭の(1)(2)(3)は、天・地・人類がどのように誕生したかとの疑問を設定した上で、爺覺朗努の神が創造したとの答えを提示する。この部分は全体のプロローグとしてここに配置されている。

次の(4)(5)(6)では、爺覺朗努はなぜ天を造ったのかとの発問に答える形で、神が天を造った動機と、創造のプロセスを開示する。その動機は、天空が一面の混沌で爺覺朗努は宙ぶらりん状態を余儀なくされていたので、整然とした秩序体としての天を創造して安定した居場所を確保するためだったと説明される。つまり神が天を創造したのは、神自身のためだったというのである。

また創造のプロセスは、天空↓天体↓雲↓風↓鳥の順序だったと語られる。

次の(7)(8)(9)(10)(11)は、爺覺朗努が地を創造した動機とプロセスを開示する。太古の昔、爺覺朗努には足場がなく、足を着ける場所を確保したいというのがその動機だったと説明される。地を創造したプロセスは、谷や川などに一部重複・錯綜はあるものの、およそ大地↓溪谷↓江河↓山・峰↓池・谷↓泥土↓青石板↓大竹林↓野羊・大鹿・小鹿↓岩山・絶壁↓獅子・虎・豹↓青草↓岸边↓海水といった順序が示される。やはり地の創造も、天の場合と同様に神自身のためだったと語られる。なお天地の創出に付随して万物も生成されたと言われるので、(4)から(11)までの天地創造の物語は、同時に万物創出の物語ともなっている。

次の(12)(13)は、創造し終えた天地・万物を管理させるため人類を創造したと、神が人類を造り出した動機を示す。天地の場合と同様、人類の場合もまた神自身のためだったとされる。以上が天地・万物・人類が創造された原因とプロセス、すなわち宇宙生成の経緯を叙述する前半部分となっている。

(14)は語る。神は自分自身のために天地・万物・人類を創造した。しかるに人類は、それを神が自分たちに

もたらした恩恵だと受け止めた。そこで人類は、神に感謝する必要があると考え、神の居場所を探索するが、誰もそれを知らない。この(14)は、人類の神に対する信仰、神への祭祀をテーマとする後半部分の冒頭である。神自身のために宇宙が創造されたにもかかわらず、それを自分たちのために神が与えた恩寵だと勘違いした人類が、神への祭祀を欲求したと、宗教的祭祀の起源を説いてテーマを転換させる。

(15)(16)は次のように語る。人類の中では格鳥列祭と格鳥列榜の二人だけが、預言者として神の言葉と事跡を知っていた。二人は人類に対し、お前たちが探している神の居場所は、高山の巨岩の下であり、原始林の巨木の下だと教える。二人の預言者が二つの場所を指定したのは、そこは神が両足を大地に着ける場所であり、天に伸びる高山と巨木を通じて人類が神の存在を感得できる通路、神と人の接点となり得る場所だからである。

続く(17)(18)は、二人の預言者の指示に従い、人類は高山の頂の巨岩の下に酒を供え、原始林の巨木の下に鶏を捧げて感謝の意を表したと語る。ここに宗教的祭祀が開始される。

(19)は次のように語る。ついに宗教的祭祀が始まったのだが、どんなにその場所で祭祀しても、人類は決し

て神を仰ぎ見れず、神に拝礼できない。なぜならそこに神は居らず、人類はついに神の真の居場所を探し当てられなかったからである。もとよりここに語られる内容は、二人の預言者側から見た光景であって、人類にかかる自覚はない。このように(19)は、いかほど偽りの祭祀を繰り返しても、神の真の存在を感得はできぬのだと、祭場・聖地における神の不在を説く。

(20)は次のように語る。そこで二人の預言者は人類を覚醒させるべく、高山の巨岩の下や原始林の巨木の下に、神は存在しないと教え諭す。(15)(16)で二人が指定した場所は、神の存在を感得できる通路・接点として示したのであって、その場所に神自身が存在するわけではないのだと教導したのである。

(21)(22)は次のように語る。だが人類は二人の話の真意を理解できず、ひたすら神を仰ぎ、神を拝みたいと願う。そこで人々はなおも巨岩の下や巨木の下を訪ねて、巨石・巨木を崇拜・祭祀し、それこそが万事の根本だと信じ続ける。預言者の真意を理解できない人類は、神の存在を極度に矮小化し即物化し、巨石・巨木といった物体そのものを物神化して信仰・祭祀の対象とし続ける。

(21)(22)には、宇宙を創造し、宇宙と等身大である宇宙神の偉大さを全く理解できず、宇宙にあつてはちっぽ

けな存在に過ぎない巨石・巨木を神と見なして祭祀する、人類の愚かさが批判される。ただし批判ではあるものの、単純に非を咎めるのではなく、そこには人類の抜きがたい愚かさへの哀れみや諦観が滲み出ている。

最後の(23)は次のように語る。人類の無理解を前に、二人の預言者は重ねて真実を啓示する。神は天界にこそ存在するのであって、大地に足は着けているものの、そもそも地上になど住んではないのだと。宇宙神たる偉大な神は、決して地上のちっぽけな巨石・巨木を住処にしたりはしない。もし宇宙神の存在を感得したいと願うのであれば、通路・接点たる場所に立つて意識を天界に拡張し、全身全霊を以て自己を宇宙神に没入させるしか途はない。二人の預言者は人類にこう告げるが、これに対する人類の反応を一切記さぬまま、叙事詩は突如ここで終わる。プロローグに対応するエピローグを取って配置しない、この突き放したような終わり方によって、作者は決して覚醒することなき人間存在への憐憫と諦観、宗教祭祀の場に残された巨大な喪失感を暗黙の余韻として表出する。

このように苗族創世歌は、宇宙の創造神と人類の関係をそのテーマとする。神は神自身のために宇宙を創造した。ゆえに神は、人類に対しそもそも感謝や恩返しを要

求してはいない。しかるに人類は、神は自分たちへの恩寵として宇宙を創造したのだとする、自己中心の心を得違いを犯し、創造神と人類の関係を自分たちに理解できる程度にまで矮小化し、形骸化した祭祀儀礼に自己満足しようとする。このままでは、神と人類の真の關係、神は天地・万物を管理させる道具として人類を造り出したに過ぎず、神は自らのために宇宙を創造したとの理解に到達はできない。

かつて太古の人類は、圧倒的な大自然に囲まれながら生活し、日々接する大自然の光景から、一人一人が全身全霊で宇宙神の神秘的力を感得していた。だが後世の人類は、それまでの宇宙神と人類の關係を、宗教的祭祀なる形に置き換え、人間社会内部で定型化し矮小化し儀式化した。それによつて人類は、かえつて宇宙そのものでもある宇宙神と人類の關係の真相、宇宙はそれ自身のために自らを創造したのであつて、決して人類のために宇宙が生成されたのではないとの真実を見失つてしまふ。

創世歌の作者は、原始の感性の記憶を下敷きに、宇宙神と人類の真の關係を回復せよとする重いテーマを、二部構成の長編叙事詩によつて見事に作品化したと言える。

### 三 《問物》の内容

本章では比較の対象である《問物》の内容を紹介する。そこで以下に筆者が復元した《問物》の全文を、原文・書き下し・現代語訳の順に掲げる。

#### 《問物》

昏(凡)勿(物)流型(形)、系(奚)尋(得)而城(成)。  
流型(形)城(成)豐(體)、系(奚)尋(得)而不死。  
既城(成)既生、系(奚)毋(呱)而鳴。既巢(拔)既  
樞(根)、系(奚)遂(後)「(1)之系(奚)先。盒(陰)  
易(陽)之原(処)、系(奚)尋(得)而固。水火之味(和)、  
系(奚)尋(得)而不厚(厚)。緝(問)之曰。民人流型  
(形)、系(奚)尋(得)而生。」(2)流型(形)城(成)  
豐(體)、系(奚)遊(失)而死。又(有)尋(得)而成、  
未智(知)左右之請。天墜(地)立冬(終)立嚮(始)、  
天墜(降)五卮(度)、虛(吾)系(奚)「(3)奠(衡)  
系(奚)從(縱)。五既(氣)竝至、虛(吾)系(奚)異  
系(奚)同。五言才(在)人、管(孰)爲之公。九區出  
緝(誨)、管(孰)爲之逆。虛(吾)既長而」(4)或老、  
管(孰)爲疾(侍)奉。魄(鬼)生於人、系(奚)古(故)  
神祟(明)。骨(骨肉)之既赫(靡)、亓(其)智(知)

愈疇、亓(其) 夬(缺) - 系(奚) 雀(適)。管(孰) 智(知)「(5) 亓(其) 疆(疆)。魄(鬼) 生於人、虚(吾) 系(奚) 古(故) 事之。骨(骨肉) 之既赫(靡)、身豐(體) 不見、虚(吾) 系(奚) 自飮(飼) 之。亓(其) 雀(來) - 亡托(託)「(6) 虚(吾) 系(奚) 岿(時) 之室(賽)。祭異(禩) 系(奚) 进(升)。虚(吾) 女(如) 之可(何) 思叟(嬰)。川(順) 天之道、虚(吾) 系(奚) 吕(以) 爲貢(首)。虚(吾) 既粵(得)「(7) 百管(姓) 之味(和)、虚(吾) 系(奚) 事之。昭天之喙(明) 系(奚) 粵(得)。魄(鬼) 之神系(奚) 飮(飼)。先王之智 - 系(奚) 備。」「(8 簡途中) 日之又(有)「(9) 耳(珥) - 晒(將) 可(何) 望(聽)。月之又(有) 軍(量) - 晒(將) 可(何) 正(征)。水之東流、晒(將) 可(何) 涅(盈)。日之訶(始) 出、可(何) 古(故) 大而不晷(耀)。亓(其) 人(入)「(10) 申(中) - 系(奚) 古(故) 少(小) 雁疇(跋(樹)。餌(問) 之曰。天管(孰) 高與。望(地) 管(孰) 徠(遠) 与(與)。管(孰) 爲天。管(孰) 爲陞(地)。管(孰) 爲盪(雷)。「(11) 管(孰) 爲蓄(寢)。土系(奚) 粵(得) 而坪(平)。水系(奚) 粵(得) 而清。卉(草) 木系(奚) 粵(得) 而生。」「(12 簡A) 含(禽) 獸系(奚) 粵(得) 而鳴。」「(13 簡B) 夫雨之至 - 管(孰) 零漆之。夫风(風) 之至 - 管(孰) 颺(披) 颺而进(屏)

之。」「(14 簡上半分)

【A】凡そ物は形を流すに、奚をか得て成るや。形を流して体を成すに、奚をか得て死せざるや。既に成り既に生ずるに、奚ぞ呱して鳴くや。既に抜き既に根うるに、奚か之を後とし奚が先とせんや。陰陽の処るは、奚をか得て固きや。水火の和するは、奚を得て厚からざるや。

【B】之に問いて曰う。民人形を流すに、奚をか得て生ずるや。形を流して体を成すに、奚をか失いて死するや。得ること有りて成すに、未だ左右の請を知らざるか。

【C】天地終わりを立て始めを立て、天は五度を降すに、吾は奚か衡とし奚か縦とせんや。五氣並び至るに、吾は奚をか異とし奚をか同とせんや。五言は人にあるも、孰か之れが公を為さんや。九区は誨を出すも、孰か之れが逆うるを為さんや。吾は既に長じて老ゆること或るも、孰か侍奉を為さんや。

【D】鬼は人より生ずるに、奚の故に神明なるや。骨肉は之れ既に靡ぶも、其の知は愈いよ疇かなれば、其の缺は奚にか適わるるや。孰か其の疆なるを知るや。鬼は人より生ずるに、吾は奚の故に之に事

うるや。骨肉は之れ既に靡ほろび、身体は見あらわれざるに、吾われ奚なんぞ自ら之を飼やうや。其の来るや、託こせること亡なきに、吾われ奚なんぞ時に之れ賽せゆるや。祭禩まつりするに、奚なんぞ升あむるや。吾は之を如何にして喪あくと思わんや。

【E】 天の道に順したがうに、吾は奚なんを以て首こうべと為さんや。吾既に百姓の和を得れば、吾は奚なんをか之を事とせんや。昭天の明は、奚なんにか得らるるや。鬼の神なるは奚なんにか飼やわるるや。先王の智は奚なんにか備たまれるや。

【F】 日の珥み有るは、將に何をか聴かんとするや。月の暈か有るは、將に何をか征せんとするや。水の東流するは、將に何をか盈みたさんとするや。日の始めて出ずるや、何の故に大なるも耀かがかざるや。其の中に入るや、奚なんの故に小さきも雁かく啼なきて樹かるるや。

【G】 之に問いて曰う。天は孰いかれに高きか。地は孰いかれに遠きか。孰いかか天を為れるや。孰いかか地を為れるや。孰いかか雷かみなりを為れるや。孰いかか霆たれを為れるや。土は奚なんをか得て平らかなるや。水は奚なんをか得て清らかなるや。草木は奚なんをか得て生ずるや。禽獸は奚なんをか得て鳴くや。夫れ雨の至るは、孰いかか雩あまして之を漆うるくするや。夫れ風の至るは、孰いかか披か飄ひらせて之を屏か

うや。

【A】 (1) すべて物は形を流動させ続けるのに、何を獲得したことにより、一定の身体を形成するのであるか。(2) 形を流動させて一定の身体を形成するのだが、何を獲得したことによつて、一定の寿命を保つのであろうか。(3) すでに身体を形成し、すでに生まれてきたのに、なぜ乳児は泣くのであろうか。(4) 昔から抜き取り昔から植え付けてきているのだが、どちらが後でどちらが先なのであろうか。(5) 陰と陽がそれぞれの場所に落ち着いているのは、何を獲得したことによつて、安定しているのであらうか。(6) (正反対の性質を持つ) 水と火が調和するのに、何を獲得したことによつて、両者は近接しているのであらうか。

【B】 (7) 質問したい。(すべて物は) 形を流動させ続けるのに、人間は何を獲得したせいで(人間の形態で) 生まれてくるのであろうか。(8) 形を流動させて身体を形成したのに、何を失ったせいで死ぬのであろうか。(9) 何かを獲得したことにより身体を形成したのに、誰が請求してそうなのであろうか、いまだに分からないのであろうか。

【C】(10) 天地は終わりと始まりの区別を立て、上天は

(左木・右金・前火・後水・中土の) 五度を降したが、私は(南北と東西の) どちらを横としどちらを縦とすればよいのであろうか。(11) (木・火・土・金・水の) 五種類の気がともにやって来るのだが、私はその中の何を自分とは異質な気とし、何を自分と同質の気とすればよいのであろうか。

(12) (仁・義・礼・智・信の) 五常を説く言辞が人々の口から発せられるのだが、その中の誰が公正さを備えているのであろうか。(13) 多くの役所が教誨を發布するのだが、いったい誰がそれを受け止めるのであろうか。(14) 私はすでに年を取って老人となったのだが、誰が私にかしずいて世話を見てくれるのであろうか。

【D】(15) 鬼はもともと人間だったのに、なぜ神明を備えるようになったのであろうか。(16) (死者である鬼の) 肉体はすでに滅んでしまったにもかかわらず、鬼の知が生前よりも明察だとすれば、喪失した肉体の機能はどのようにして補充されたのであろうか。(17) 誰が鬼が強いことを知ったのであろうか。(18) 鬼はもともと人間だったのに、なぜ私がお仕えしなければならぬのであろうか。

(19) (鬼の) 骨肉はすでに滅び、身体を現さないのに、私はなぜ自分で鬼を養うのであろうか。(20) 鬼は降臨するが、依頼した覚えがないのに、私はどうして時節ごとに感謝の祭祀をしなければならぬのであろうか。(21) (肉体のない鬼を) 祭祀するのになぜ飲食物を献上するのであろうか。(22) 私はどのようにして(進上した飲食物に鬼が) 満足したと思量すればよいのであろうか。

【E】(23) 天道に順う場合、私は何を一番重要だとすればよいのであろうか。(24) 私がすでに百官の調和を獲得してしまえば、私は何を自分の仕事とすればよいのであろうか。(25) 上天の明察は、どのようにして獲得されたのであろうか。(26) 鬼の神妙な靈力は、どのようにして養われるのであろうか。(27) 先王たちの智慧はどのようにして備わったのであろうか。

【F】(28) 太陽に左右の耳があるのは、いったい何を聞くこうとするのであろうか。(29) 月の周りに量があるのは、いったい何処を征伐しようとするのであろうか。(30) 河川の水が東に向かって流れるのは、いったい何を満たそうとするのであろうか。(31) 太陽が始めて昇るとき、なぜ大きいにもかかわら

ず強く輝かないのであろうか。(32) 太陽が地中に没するとき、なぜ小さいにもかかわらず、赤く輝きながら隠れるのであろうか。

【G】(33) 質問したい。天はどの方面に向かって高くなっているのだろうか。(34) 地はどの方面に長く延びているのであろうか。(35) 誰が天を創造したのであろうか。(36) 誰が地を創造したのであろうか。

(37) 誰が雷を創造したのであろうか。(38) 誰が稲妻を創造したのであろうか。(39) 土は何を獲得したことによって平らなのであろうか。(40) 水は何を獲得したことによって清らかなのであろうか。

(41) 草木は何を獲得したことによって生ずるのであろうか。(42) 禽獣は何を獲得したることによって鳴くのであろうか。(43) いったい雨がやって来るのは、誰が雨乞いして空を黒くするのであろうか。(44) いったい風がやって来るのは、誰が吹き渡らせてそれを追い立てるのであろうか。

#### 四 苗族創世歌と《問物》の比較

本章では苗族創世歌と《問物》を比較する。苗族創世歌は翁覺朗努(天神)による宇宙創造と宗教祭祀におけ

る神の不在といった、一定のテーマやストーリーを備えた長編叙事詩である。これに対して《問物》は、一定のテーマやストーリーを持っていない。関連する素材を扱う疑問句が連続して複数のブロックを作ってはいるが、だからといってブロックの排列が一定のストーリーを形成しているわけではない。したがって《問物》の側は、叙事詩ではないという消極的意味では叙事詩に分類できるかも知れないが、物語ではないという点では、厳密には叙事詩とは称しがたいであろう。これが両者の第一の相違点である。

苗族創世歌では、総数一六一句の中で、疑問句はわずかに十個に過ぎず、しかも二部構成の前半部分、特にプロローグの部分に六個が集中するという偏在現象を示している。しかも発問に対しては必ず解答が用意されている。ところが《問物》の側は、すべて疑問句のみで構成され、四十四個の発問に対する解答は一切示されない。すなわち《問物》は百七十余の発問を連ねる『楚辞』天問と同様、全篇が「有問無答」の形式で一貫しているのである。これが両者の第二の相違点である。

また苗族創世歌は、宇宙の創造を叙述する過程で天地を始めとした万物の起源を解き明かす、由来記・縁起物語の性格を示す。そこで扱われる対象は、天地・人類・

天体・地形・気象・植物・動物など多岐に渡っている。これに対して《問物》では、種や生命の維持(1)(2)(3)(7)(8)(9)、陰陽と水火(5)(6)、天地・上天・天道などの規範(10)(11)(12)(13)(23)、鬼の実在性(15)(22)、上天・鬼・先王の超越的能力(25)(26)(27)、日月(28)(29)(31)(32)、水流(30)、天地(33)(34)(35)(36)、水土(39)(40)、雷霆(37)(38)、草木(41)、禽獸(42)、風雨(43)(44)などが扱われている。

これらの中、各種の規範、鬼の実在性、超越的能力、種や生命の維持、陰陽と水火、雷霆などの素材は、苗族創世歌では扱われていない。逆に苗族創世歌では金星や列星をも扱うが、《問物》の側は太陽と月以外の天体は扱わない。そして天地、日月、水流、水土、風、草木、禽獸などは、両者に共通する素材となっている。これが両者の第三の相違点である。ただし扱う素材に異同が見られる現象は、それほど本質的な相違ではない。ともに天地・万物に関心を寄せる点や、「天是怎样生的？是哪個來創造的？」、「地是怎样生的？是哪個來創造的？」とか「孰爲天。孰爲地」と、ともに天地未生の段階を思索する点、宗教祭祀の虚構性を説いたり、鬼の実在性に疑惑の目を向けたりする点などに注目すれば、こうした異同はむしろ

両者の類似性を示す現象と捉えるべきであろう(注4)。

以上、苗族創世歌と《問物》を比較してきた。両者の間の重要な相違点は、第一点と第二点であるが、実は第一点と第二点は表裏一体の関係にある。《問物》は「有問無答」の形式、すなわち疑問句のみで構成される形式を採るが、この形式では一定のストーリーを展開することが不可能となる。発問に対する解答を提示しない以上、作者は自己の疑念以上の主張を述べられないからである。また同じ傾向の発問のみを連続させれば、テーマを設定できなくもないが、やはり「無答」が大きな制約となつて、それは漠然としたものに止まらざるを得ない。

このように《問物》は、形式上の制約からテーマもストーリーも存在しないため、そもそも作品の完成度を云々するレベルに達しておらず、叙事詩としての文学的完成度を問題にすれば、苗族創世歌よりも遙かに劣ると評さざるを得ない。「有問無答」の形式を採用したことにより、《問物》の側が新たに獲得した文学性としては、連続する疑問句の背後に、世間の常識に次々に疑問を発し続ける、孤独な魂の存在を描き出した点が挙げられる。だがそれでもなお、苗族創世歌が重いテーマ設定や壮大なストーリー展開によって描き出した文学性と引き替えるには、あまりにも貧弱な効果でしかない。

《問物》は前稿で述べたように、苗族創世歌と『楚辞』天問を繋ぐ中間型の作品の一つである(注5)。それでは中間型の作者たちが苗族創世歌のスタイルを丸ごと受容した上で、楚国風に改作する方策は可能であつたらうか。

苗族創世歌をほぼそのまま引き写して、爺覺朗努なる苗族の神を物語の中心に据える行為は、楚人にはもとより不可能である。さりとて上天・上帝を宇宙の創造神に据える方法も、やはり不可能であつたらう。なぜなら上天・上帝は宇宙の創造神としての性格を本来的に持つていなかったからである(注6)。結局中間型の作者たちが苗族創世歌から受容したのは、天地開闢以前の段階にまで思索を遡らせる発想と、天地・万物・人事に対して疑問句を用いて発問する形式の二点に限られた。

それでは苗族創世歌とは異なり、すべて疑問句だけを用い、解答を一切示さない「有問無答」の形式を採用したのはなぜであろうか。上述のごとく、上天・上帝を宇宙の創造神に据えて物語を構成する行為が不可能だったので、疑問句を連ねる形式だけを部分的に受容したとも考えられるが、現段階では、はっきりした原因は突き止められない。

星川清孝『楚辞の研究』は、『楚辞』天問の屈原著作説を否定した上で、古く「天問」という叙事詩があつて古

代説話を伝誦していたものが、伝誦の間にしだいに増補・追加されて、殷・周や春秋期の歴史故事をまじえた長編となり、戦国初期に現在の形に固定したのではないかと、天問成立の事情を推定する(注7)。また伊藤清司「楚辞」天問と苗族の創世歌」は、星川説の言う「古天問」が、苗族の疑問句を連ねた創世叙事詩のごときものと極めて類似したものであつたと見るのは決して無理ではないと説く。さらに伊藤氏は、苗族創世歌のような「原天問」に次々に説話伝承が増補・追加され、殷や周の説話故事を扱った部分がむしろ数量的にはこの詩の大半を占めるようになったのではないかと推定する。

今回の《問物》の発見は、両氏の推測の正しさを具體的文獻によつて裏付ける形となつた。《問物》に類する作品に歴史故事を大量に増補すれば、まさしく『楚辞』天問のような作品に仕上がるからである(注8)。「昭天の明」を扱う(25)や「先王の智」を扱う(27)が、その萌芽となつた可能性も考えられる。「有問無答」なる形式上の制約から、依然としてテーマの設定やストーリーの展開がほとんどできず、叙事詩としては不十分な水準に止まらざるを得ないとしても、歴史故事を大量に取り入れた結果、『楚辞』天問は《問物》よりは叙事詩としての見かけを大幅に強化できている。大量の歴史故事の取り込み

は、淵源たる苗族創世歌が備えていた長編叙事詩としての面目を、多少なりとも回復させる効果を發揮したと言える。してみれば、歴史故事を欠く《問物》から歴史故事が過半数を占める『楚辞』天問への変化は、叙事詩なるスタイル自体が欲した必然的変化だったとも言えよう。

## 注

- (1) この点に関する詳細は、拙稿「上博楚簡『凡物流形』の全体構成」(『中国研究集刊』四九号・二〇〇九年) 参照。
- (2) 『史學』第四十八卷第二号(三田史学会・一九七七年)。
- (3) 今回たまたま《問物》が発見されたわけであるが、《問物》に類する中間型の作品は、他にもかなりの数存在したと考えるべきであろう。
- (4) 藤野岩友『巫系文学論』(大学書房・一九六九年)「設問文学としての「天問」」は、問呵の祖型を神意を占う卜問の形式に求め、『楚辞』天問の成立を巫祝の伝統習俗と結び付ける。しかし貴州苗族創世歌が宗教的祭祀の虚構性を揶揄したり、『問物』が鬼神祭祀と絡めて鬼の実在性に執拗に疑念を表明するなどの現象に注目すれば、『楚辞』天問の成立を巫祝の活動と結び付ける理解には、強い疑念を抱かざるを得ない。
- (5) 苗族も内部は多くの諸族に分かれている。そのため苗族創世歌にも多くの種類が存在するが、その採録作業は充分に行われてはいない。湖南省湘西土家族苗族自治州に居住する苗族が伝誦する古歌「辛女」には、宇宙生成の物語が語られているそうであるが、現在古歌集の編集作業中とのことで、筆者は未見である。このように今回筆者が利用できたのは、多くの作品の一つに過ぎず、また《問物》も多数存在したであろう中間型の作品群の一つに過ぎない。したがって貴州苗族創世歌と《問物》の比較だけでは、苗族創世歌群→中間型作品群→『楚辞』天問といった流れの全体を検討したことにはならず、利用できた範囲内でのサンプル調査をしたというに止まる。利用可能な資料の増加を待つて、後日さらに検討を加えることとしたい。
- (6) この点の詳細に関しては、拙著『古代中国の宇宙論』(岩波書店・二〇〇六年)、及び拙稿「上博楚簡『東大王泊旱』の災異思想」(『集刊東洋学』第百号・二〇〇八年) 参照。
- (7) 星川清孝『楚辞の研究』(養徳社・一九六一年)第五章「天問」篇の研究。
- (8) ただし伊藤氏は疑問句が多く登場する冒頭部分のみを引用した上で、苗族創世歌のような「原天問」に歴史故事が増補・追加されたのではないかとするが、「造天地万物歌」全体を考察してみると、とてもそのようには考えられない。

「造天地万物歌」は一定のテーマやストーリーを備え、首尾一貫した緊密な構成を持つ叙事詩であり、そこに脈絡なしに歴史故事を増補・追加する操作は不可能である。ストーリーを持たないため、プロックの順序を差し替えても支障のない《問物》や、同じくストーリーがないため次序が不次序かが永く議論されてきた『楚辞』天問とは、作品の性格が基本的に異なるのである。したがって苗族創世歌のような作品に直接歴史故事が増補されたのではなく、《問物》のような中間型作品が作られた後に、大量の歴史故事が増補・追加されたとの順序を想定すべきである。また苗族創世歌の疑問句は純粹な疑問文で、質問によって叱責したり咎めたりする『楚辞』天問の「問呵」とは性格が異なる。ところが《問物》になると、一部ではあるが、各種規範や鬼神の实在性への疑念を表明する部分に、すでに「問呵」の性格が表れて来ている。やはりこの点からも、苗族創世歌と『楚辞』天問の間に《問物》のような中間型作品の存在を想定すべきであろう。

【附記】貴州苗族創世歌の翻訳に際し、東北大学文学研究科の花登正宏教授から懇切な御教示を賜った。ここに厚く感謝の意を表したい。